

## はじめに

白梅学園大学・短期大学学長 汐見 稔幸

保育学，教育学，福祉学等，人間の育ちや生きることのあり方や意味を問う学問は，今のきなみ研究の視野，視点をどこまで掘り下げるのかが問われています。きっかけはいうまでもなく，東北・関東を襲った大地震・津波による大きな災害と，それを機に生じた深刻なある意味未曾有の原発問題です。

なぜ，こうした問題と保育学，教育学，発達学，医学，福祉学等の学問のあり方がつながっているといえるのでしょうか。

たとえば原発について。今，放射線による被害が予想をはるかに超えて深刻になっていることが次々と報告されていますが，もともと原発は夢の発電システムといわれていたものでした。

化石燃料がやがて枯渇することが分かっている中で，うまく使用すれば半永久的な燃料補填システムとなる原発に期待がかけられたことには必然性もあったのかも知れません。

しかし簡便に大きな利益が半永久的に得られるシステムなどというのはどこかおかしい，無理があるのではないかということは，一部の人を除いて十分に議論されてきませんでした。なぜ国民の多くはそのことに気づかなかったのか，なぜ事故後にはじめてその深刻さを教えられたのか。そこには，私たち日本人の日常の生きる姿勢とそれを支える価値指向の問題があるように思います。

戦後の日本は，生産力を柱に，より大きく，より早く，より効率的に・・・ということを暗黙の価値基準にして運営されてきました。その価値指向の全体を私たちは現代文明と呼んでいますが，その文明の本質である，人間の欲求をより簡便に，より大規模に，より早く，より快適に実現するということの有力なシンボルとして原発は位置付けていたのです。

しかし，その過程で，非効率的なもの，非生産的なもの，ゆったりしたもの，非快適なものは，次第に片隅に追いやられ，その独自の価値は十分に追求されてきませんでした。縦横に舗装道路や高速道路が走り，新幹線や飛行機が行き来し，自動車と超高層ビルがあふれる東京のような大都市はつくられました，小さな原っぱや夕涼みできる道ばた，子どもたちが宝ものを探すゴミ置き場等はきれいに消されてしまいました。宮崎駿が描くような世界ですが，これはもうアニメでしか見られなくなったのでしょうか。そもそも子どもや障がい者，高齢者等は，非効率的で非生産的，非快適なものシンボルのような存在です。一部の関係者を除いて，そういうもの・存在にも大事な価値があるとは次第に誰も言わなくなってしまったのが戦後社会でした。少子化問題や虐待問題，介護問題など，子どもや女性，高齢者の抱える問題が取り上げられるようになってきたのは，それらが深刻

な社会問題になってきたからであって、その存在に大事な価値があるとみんなが認めたからではありません。

原発問題は、それほど深刻になり得るものであったことを国民があまりに知らなかった、知らされていなかった、そのことの責任はどこにあるのかという問いと同時に、それを認めてきた私たち国民の社会観、価値観、人間観、世界観などに、気がつかない大きな課題があったという問題としても了解されなければ、理解されたことにはならないでしょう。あれはあれで仕方がなかった、もっと安全な方法を探そうともう一度同じ道を歩むのか、ゆったりとした社会、自給自足をモデルとする手づくりの社会の可能性を探そうとするのか、それとも・・・という問題を引き受けなければ、これだけの犠牲の意味がないということです。

そう考えると、私たちが専攻している保育学、教育学、発達学、医学、福祉学等も、たとえば、一体どういう価値指向を有していたかということ問い直さねばならないのではないかと、ということになるのではないのでしょうか。こうした学問は、自覚していると否とにかかわらず、どういうことが人間にとって大事かということ暗黙の前提に成り立っているからです。それを一度問い直そうとすることが学問をする者の誠実な姿勢なのではないかということです。

ともかく、私たちにとって今は大事な局面であることは間違いないと思います。私たちの研究が歴史にどう棹さしていくのか、課題は重く大きい。